

二〇一三年度 (中学) 国 語

〈注意〉

始まりのチャイムが鳴るまでに、次の注意をよく読んでおきなさい。

- 一 始まりのチャイムが鳴るまで、問題や解答用紙に手をふれてはいけません。
問題一冊(13ページ)と解答用紙一枚です。
- 二 試験の始めと終わりは、チャイムで合図します。
試験時間は、八時三十五分～九時二十五分の五十分間です。
- 三 始まりのチャイムが鳴ったら、解答用紙に受験番号、氏名を記入しなさい。
- 四 問題の内容について質問してはいけません。
- 五 困ったこと(筆記用具を落としたときなど)があつたら、だまって手をあげなさい。
- 六 持ち物をかしたり、かりたりしてはいけません。
- 七 答えはすべて、解答用紙に記入しなさい。
- 八 終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙をうらがえしにして、問題の上におきなさい。
- 九 解答用紙だけ回収します。

— 次の記事は、在日の詩人による回想記の一節である。これを読んで後の問に答えなさい。

「国民学校」に成りたての三年生のころまで、悪童たちとのいさかいはニツカのようにつづきました。退校時をねらって取り囲むので、先生の目につくことはめったとありません。飴玉に加えて当時はやっていた「パッチ」という、ペタン遊びの絵札までせびってくるのです。皇軍の戦闘模様がアツテのボール紙に色刷りで印刷されてあるカードですが、丸いのと横長の四角いのとがあつて、そのどれかを相手の絵札に打ちつけて下に入りこむか、ひっくり返すとそれを取り上げることができるゲームです。

私の「パッチ」はいつでもまっ更でした。城内に一店しかないオモチャ屋で毎日のように買っていましたから。はかわいそうなくらいその「パッチ」遊びが不得手で、「パッチ」を打ちつけると必ずといっていいほど地面を叩いて、指を腫らすか血をにじませていました。

私はいつも勢子役のひとりでした。また古びてよれよれの絵札と自分の更の絵札とを交換する、気前のいい立会人でもありました。威張る悪童ほど更の絵札を欲しがりますので、この取り替えは大いに友好維持に役立ちました。おかげで私はどの遊び仲間たちからも誘われるまでになっていましたが、劣等感はおのこさずともいました。絵札が更だということは、自分では一枚も闘い取ったものがないということでもあります。友好のためのお小遣いを毎日くれている母に済まなくて、さも自分がせしめてきたもののように、交換した古びた絵札を家の机の上に積み上げて見せびらかすのですが、心の内ではそのような自分がいつそうみじめでもありました。私のペースに乗った母だけが上機嫌で、父は顔を合わせても一言しかくれないのです。小鼻がやや腹らむくらいでした。

私は信心するものを持っていない男ですが、それでも自ずと掌を合わせることはよくあります。つまりは祈ること

を信じてはいるのです。そこにはいつも母の像があります。ひたすら息子の平穩無事を願いつづけた母の、見返りのない生涯が私をして掌を合わせさせるのです。祈りとはそもそも思いを尽くす相手側、対象に御利益があることを念じる純粹な願掛けのことです。だからこそ祈りは信じられていいものです。思いを託せることへの感謝があつて、掌もまた自ずと合わさつてゆきます。私にとっての神々は人智のとうてい及ばないもののことですが、見も知らぬ初めての地、誰ひとり頼る人となない日本に嵐にでも吹かれたように漂着して六十余年、それでも何かと扶けてくれる人が次つぎ現れて、その慈しみで今日まで生きてくることができました。なんらかの加護が働いているのしか思えない私の在日の暮らしてあります。

今でも目に浮かぶのは朝夕のご飯を炊くたび、竈の釜の蓋を開けてしゃもじを立て、一心に祈りを上げていた母の姿です。「人様に憎しみを売るようなことがなく、人様からそしりを受けないパウでありますように。長いつながらの友達が沢山できて、周りから慈しまれて生きるパウでありますように」。育ち盛りの私には迷信の呪文としか映りませんでした。息子の為を思つての願掛けであることだけは、幼少の時からよく伝わっていました。

母の心配は何よりも私が一人息子であるということでした。一人息子が嫌われるのはわがままだからだと、「独り占めはいけません。分け合いなさい。なんでも先に手を出してはなりません。食べ物でもけんかでもそれは同じです」と友達ができるための心得を母は毎日のように口にしていましたが、それでも目に余るほど服をよこして帰ってきた日などは、少しも息子をかまおうとしない、そのように見えている父への不満をまた繰り言のように洩らしもするのです。

母にすると学校へ申し入れに行つてくれるとか、言いがかりをつける悪童たちの親に抗議をしてくれるとか、親父の威厳で息子をかばつて欲しいのに、父は子どものけんかだと、一切かまおうとはしませんでした。ですが私には、男どうしの信頼で父とはつながっているという自信がありました。大いにやり合つて帰つた日でも、いつものようにニツと白い歯を見せてくれる父が何よりの励ましでした。「よくがんばつたな！」という父からの男どうしのあいさ

つでした。

三年生の中ごろからだつたでしょうか。母もようやく目立ちすぎるわが子のいでたちに気がついて、私の通学服は普通の学生服、襟の付いた黒の木綿服に着せ替えられました。しかし私にはさしたる変化ではありませんでした。もうそのころにはダブルのセル服に対するやっかみも下火になっていましたし、私が進んで上着をぞんざいに脱ぎ捨てておいたり、よごれることを気にしないで土まみれになることにむしろ快感すら覚えていた時期でしたので、もはや私のいでたちは特別なものではなくなつていたのです。やたらとよこして帰る特製の服に、母が音をあげたというのが本当だったのかもしれませんが。

(金時鐘「ひたすらつづらおり」による)

*「国民学校」：一九三八(昭和二三)年、朝鮮教育令が改訂され、小学校に当たる学校の呼び名が変わつた。

*城内：濟州邑城内。現在の韓国濟州市。

*一瞥：ちらりと見ること。

*加護：神仏などが守り助けること。

*パウ：筆者の幼名。本名とは別につけ、幼少時、日常の呼び名として用いられた。

問一 本文中の□にあてはまることばを考えて答えなさい。

問二——線部①とあるが、「そのような自分」とはどのような自分か。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア うまくできないことをお金で解決しようとする自分。
- イ だましてまで母親にほめられようとする自分。
- ウ ものをあつさり取り上げられてしまう自分。
- エ 自分の情けなさを「まかそうとする自分」。

問三——線部②「純粋な願掛け」とはどういうものか。それを説明した次の文の□ア・イを補うのにふさわしいことばを、それぞれ指定の字数で本文中から抜き出しなさい。

・
ア(十五字以内) □に頼ることも、イ(五字以内) □を期待することもない願掛け。

問四——線部③について。ここで「慈しみ」ということばを用いていることから、「今日まで生きてくることのできる」理由を筆者がどう考えていることが読み取れるか。本文中のことばを引用しながら、四十字以内で答えなさい。

問五——線部④について。

- (一) 「目立ちすぎるわが子のいでたち」とは具体的には何を指しているか。本文中から抜き出して答えなさい。
- (二) 「私」が「目立ちすぎる」いでたちをしていることは、どのようなことにつながったか。具体的に説明しなさい。

(三) その「目立ちすぎる」いでたちを、「着せ替えられ」るまでし続けていた「私」の気持ちを説明しなさい。

問六 当時の「私」の父親に対する気持ちが最もよく読み取れる一文を本文中から抜き出し、その初めの五字を記しなさい。

問七——線部⑤とあるが、「よこれることを気にしないで土まみれになること」でどのような気持ちになれたというのか。「母」「父」という語を用いながら説明しなさい。

問八 次の一文はもと本文中にあったものです。元に戻すのに適当な箇所をさがし、直前の五字を抜き出して答えなさい。

問九——線部 a・b のカタカナを漢字に改めなさい。

問十——線部 c・d の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|---|--------------|
| c | |
| ア | 厳しく叱ること。 |
| イ | 失敗を責め立てること。 |
| ウ | 言いがかりをつけること。 |
| エ | 悪く言うこと。 |
- | | |
|---|----------|
| d | |
| ア | これみよがしに。 |
| イ | いいかげんに。 |
| ウ | なげやりに。 |
| エ | 大げさに。 |

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

立石美奈は小学六年生の女の子。父親が一年間だけ山奥の村立高校で英語を教えることになったため、それに伴って都会を離れ、コンビニひとつない村の職員寮で暮らすことになった。消極的で友達づきあいの苦手な美奈は、慣れない山暮らしもあってイライラを募らせるが、明野さんの木工房に入り始めてからは楽しみも見つけられるようになった。職員寮によく顔を出す山田は高校三年生で、美奈のことをミラクルと呼び、友達のように相手をしてくれている。美奈も山田を相手にすると家族に対する時と同じようにぶっきらぼうな言葉遣いが出てしまう。山田は進学希望を抱えて悩んでいたが、地元で就職することに決めたらしい。

家にもどると、山田はまだ寝転がって『巨人の星』を読んでいた。少しも深刻そうには見えない。ゲハゲハ笑う山田を見ながら□をかしげる。ふと、マンガから顔を上げた山田と目が合う。

「どうした、ミラクル。何、難しそうな顔してるんだ」

「難しそうな顔ってどういうんだ」

「大学、行くつもりだったのか？」

山田はふつと笑った。その笑顔がちよつとだけ寂しそうに見えた。

①「しかたないだろ」

「しかたないのか」

「まあ、おれはおれなりに、ここが好きだからな。何といっても、生まれ故郷だし」

「故郷がいいのか」

わたしの故郷は、練馬の光が丘団地ということになるのだろうか。でも、光が丘がすごくいいとも思っていない。山田はマンガを閉じた。

「ちよつと散歩しようぜ、ミラクル」

めんどろだと思っただけで、わたしはシタカった。山田の歩くテンポはゆったりとしている。けれど歩幅が大きいので、けつこう速い。ゆつたりすたすと、山田は山道を登っていく。こんなのにつきあったら、息が上がってしまうぞ。と、背中に向かって心の中でだけ文句をいう。けど、思ったより大丈夫だった。

「ミラクル、足が丈夫になったな。明野さんのところに通って鍛えられたんだな」

山田が振り返って笑う。そうか。気がつかなかった。

「おれのオヤジはな、山で死んだ」

「遭難？」

「事故だよ。林業の現場はけつこう事故が多いんだ。注意してもな、思いもかけないところに、危険が潜んでいるんだ。林道の補修やってて、パワーショベルが石をはじいて、その石が頭に直撃」

②想像しかけてストップした。いやだ、そんなの……

「……それでもやるのか」

「まあな。きついし、危険だし。けど、ここは悪くない。川越家は大地主だから、シユウヤク的な仕事ができる。高性能林業機械もドウニユウしてな、効率化を図っている。すごいぞ、スイングヤーダの集材なんか。ミラクル、見たことないだろ。林業の実際の現場なんて」

うなずく。スイング何とかは見たことないどころか、初めて聞く言葉だ。たぶん、切った木を集めるためのブルドーザーみたいなやつなのだろうと勝手に想像する。

峯川村で林業が盛んだといっても、このあたりでもスギの木があるといっても、実際に働いている人たちを見たこ

とはなかった。川越林業が管理している山は広い。

「一度、山土場^{やまどば}とか見るといいんだけどなあ」

「ヤマド？」

「山土場。峯川の少し下流にある。そこに木材が集められるんだ」

「そうか」

もちろん、そんな場所は見ただけでもない。夏までは家と学校を行ったり来たりするだけだった。最近はそのに工房が加わったけれど。この村のスギ林なんて、興味もなかった。

「たしかに林業は厳しいけどな。輸入材に負けてつから。でも、一時よりは、国内産の需要^{じゅぎょう}は増えてるんだ。もっと自給率を高めなくちゃな」

「そうか」

「勉強は、大学だけでするんじゃない。働くなかで学ぶことだって多いはずだ。こんな山シ中、うんざりだと思ったこともあるけど、やっぱりこの景色が好きなんだろうな」

「そうか」

同じ言葉しか出てこない。山田が少しおかしように笑った。だけど、ほかに何がいえるんだろう。やっぱり、大学、行きたかったんじゃないのか？

「なあ、ミラクル、スギは何年ぐらいで生長するか知ってるか？」

「五十年ぐらい」

さつき長島クンに聞いたばかりだ。

「よく知ってるな」

④だてに峯川で暮らしてない」

「そうか。けどよお、ちょっと気が遠くなるぐらいの時間だろ」

たしかに想像できない。五十年後……六十二歳^{さい}？ ばあちゃんと同じぐらいだ。

「見てみるよ。まっすぐに天を衝いて、きれいだろ、ここのスギ林は」

山田が上を向くのに合わせて、わたしもスギの木のでっぺんを見ようとする。目の前のスギを見上げたら、首が痛くなった。それでも空はその先にあつた。

「ここまで育てるには、いろいろ手をかけなくちゃいけないんだ。地拵^{じごしら}えをして植林、下刈^{しもが}り、除伐^{じょはつ}、枝打ち^{えだうち}、間伐^{かんはつ}……」

見上げたまま聞く言葉はよくわからなかった。でも、今、いちいちその言葉の意味を聞いて、山田の言葉を中断してはいけないような気がして、わたしは黙^{だま}っていた。

「そうして何十年もたってから伐採^{はたさい}をする。樹齢^{じゅれい}百年なんてものもある。つまり、おれが山で仕事して、植えた木は、自分で伐採できない。そういう仕事なんだ」

「そうか」

ふと、ミキ^{ミキ}に触^ふれてみる。木の肌^{はだ}がざらつとしている。耳を近づける。

「コキユウしてるだろ」

あいまにうなずく。本当は、そんなことわからなかった。でも、たぶん、そうなのだ。

「この山の向こうに、じいさんが植えた木がある。それをあと何年かしたら、おれが伐採する。それからオヤジが植えた木を、おれが手入れをする。枝打ちをしてりっぱな木材にする。それを、もしかしたらおれの子どもか、孫が切ったりしてな」

「すこいな」

「だろ？」

⑤ 山田はにやっと笑って、わたしの頭をぐりぐりつとなでた。やめろ、髪が乱れるじゃないか。せつかくちよつとだけカンドーしたのに。

(濱野京子『木工少女』による)

問一 線部①②のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 を補うのに適当な語を漢字一字で答えなさい。

問三 線部①「しかたないだろ」とあるが、ここからうかがえる山田の心情として適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア 進学をあきらめたことで落ち込んでいる。
- イ 決断したことなので割りきろうとしている。
- ウ 心配をかけないようにと空気を出している。
- エ 避けたい話を持ち出されて不愉快に感じている。

問四 線部②「想像しかけてストップした」③「勝手に想像する」とあるが、その理由として適当なものを次
の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 想像するのも馬鹿馬鹿しいことだから。
- イ いくら想像しようとしても限界があるから。
- ウ 想像したくないことを想像することになるから。
- エ 想像したものが正しいかは確かめるまでもないから。
- オ ていねいに想像すると話をしっかり聞けなくなるから。

問五 線部1～3の「そうか」について、その説明として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答え
なさい。

- ア 意外にも真剣な説明に圧倒されている。
- イ 興味のない事柄なので聞き流している。
- ウ 納得はできないがそうは言えずにいる。
- エ 聞いたこともなかった話に感心している。
- オ 理解できないが分かったふりをしている。
- カ 話の腰を折らない程度に軽く応じている。

問六 — 線部④「だてに峯川で暮らしてない」とあるが、この時の美楽の心情として適當なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア 山田の熱意に共感していることを伝えようとしている。
- イ あまりにも基本的なことを聞いてくる山田に反発している。
- ウ 当初は嫌でしかたがなかった峯川に愛着を感じ始めている。
- エ 少し見栄を張ることで峯川の一員として認められようとしている。

問七 — 線部⑤について、この時の山田の心情として適當なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 美楽が真剣に話を聞いてくれて嬉しく思っている。
- イ 分かったふりをしている美楽を小馬鹿にしている。
- ウ 深刻になってしまった雰囲気（きふいき）を和らげようとしている。
- エ 自分のことを熱く語ってしまい照れくさく感じている。
- オ 自分の将来の話が美楽を感心させて誇らしく感じている。

問八 — 線部⑥について。

(一) 「ちょっとだけカンドーした」とあるが、どのようなことに感動したのか、説明しなさい。

(二) 一般には漢字で書く「感動」をカタカナで書いてあるのはなぜか、説明しなさい。

受験番号

[illegible]

問一

問三
ア

イ

問四

問五
(一)

(二)

(2)

問六

問七

問八

問九

a
b

問十

c

d

a
つた
b
c
d
e

問一

問二

問四

②

③

問五

1

2

3

問六

問七

問八 (一)

(二)